

青梅市文化財ニュース

第 1 5 6 号

平成12年10月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

^{おそ}畏れ、敬う心をもって共存共栄を

今年の夏も青梅市郷土博物館前の多摩川には連日、たくさんの人が訪れました。とりわけ8月中の日曜日の前後は河川敷が、いっぱいになるほどの混雑ぶりでした。家族連れや仲間どうしが楽しく遊びに興じるのは、次への活力を増強するうえにおいて、だいじなことです。

しかし、その姿を見ていて、とても気になることがありました。兄弟と思われる小学生や、学校や職場の友達どうしと思われる若者たちが水の中で遊んだり、泳いだりしている光景が連日、見られました。ビーチボールを投げあったりして遊ぶ姿は、小学生も若者も変わりません。じつに楽しそうでしたが、その場、そのときにおける水への身構え、心構えができていない人たちが、じつに多いのです。小学生ばかりではありません。子供たちを川で遊ばせておいて、自分たちは岸辺で食べたり、しゃべったり、はては寝そべっている大人たちが多いのにも驚きました。

さまざまな排水が流れ込んで全国の各地の川が汚れ始めた昭和40年代の前半に、農山村の小中学校のプールが設置されました。それにより子供たちの水遊びや泳ぎの場がプールに移り、多くの人が川での＜水体験＞が無いまま育ち、そのまま子供たちの親になっていきました。川の楽しさだけを求め、川の怖さを子供たちに伝えない大人が年々、多くなってきているようです。昨年、神奈川県西部の川で起きた事故もそうです。分別盛りと思われる世代の人たちが、再三再四、警告があったにもかかわらず、それを無視し、増水した川に飲み込まれてしまいました。

かつての日本人は、自然と共にありました。自然の事象と仲良く付き合っていかなくては生きていけなかったのです。毎日の生活の中で自然を知り、^{おそ}畏れ、敬い、いたわって、その恵みに感謝しながら生活してきました。しかし、科学が発達し、経済が著しく発展して、日々の生活が向上していくにつれて人々は、『自然への^{いけい}畏敬と感謝の心』を、どこかへ置き去りにしてきました。また、それと一っしょに自らの安全を、自らの知恵と力とで^{まも}護る^{すべ}術をも失ってしまいました。

自然は私たちに恵みを限り無く与え続けてくれます。しかし、その力を無視し、粗略にすると自然は私たちの生命と資産を飲み込もうとします。近ごろ頻発している自然災害は人間の^{おご}驕りに対して地球が、『おれを、もっとだいじにしろ!』と叫んでいる声のようにも思えます。かけがえの無い自然と地球をだいじに共存共栄を図る心が、今、私たち一人ひとりに強く求められています。

(文責 中西 勲)